

学会ことはじめ

会長 芦田 譲 治*

植物生理学会というようなものができてもいいじやないかという話は、まえからときどきないでもなかったが、植物生理学の研究者には事務的不能者とずばらなものが多いから、とても学会の運営ができないだろうという悲観論がでると、わたしなども、みずからかえりみて、おおいにあいずちをうったものである。ところが、機が熟するとはこういうものであろう。あれよあれよというまに、世話人会ができ、廣い分野にわたる有力な方がたを発起人として、学会が発足するにいたった。そしてまだPRが十分でないとおもわれるのに、すでに多数の会員の申しこみをいただいたのである。

同じく植物の生理を問題としていながら、農学部系統の研究者と、理学部系統の研究者とは、個人的、偶然的にしか、連絡の機会をもたなかったし、おなじ学部系統のなかでも、いろいろの専門のあいだの、植物生理学に関する疏通が望まれていた。植物生理学に、アカデミックな立場で興味をもつひとや、農・林・水産学あるいは薬学や微生物工学などの立場から関心をもつひとのすべてが、たがいにしりあい、知見をしらせあい、かんがえを交換しあう廣場に、この学会がなることを、多数の会員が期待しておられることとおもう。

会員の多くは、それぞれの専門に関する学会をもつておられるだろうから、植物生理学会は、そういういろいろの学会とたがいに補ないあうような機能をもつことも大切である。

この学会は会員多数の意向にそって運営され、それによってその存在意義を高めてゆくであろうが、さしあたりは、4月にひらかれた発起人会で認められたおおまかな線にそって、うごきはじめています。

欧文誌は、Plant and Cell Physiology という名になるであろう。and Cell がついているのは、細胞や細胞以下のシステムのはたらき、したがって一般生理学的

な問題までもふくむといういみである。いろいろの方面の専門家の研究で、この雑誌の名にふさわしい内容のものを投稿していただき、日本の基礎及び応用生物科学全体を植物及び細胞生理学という面に投影した場合の実態を、正しく内外につたえるものでありたい。この雑誌に國際的の重みをもたせるためには、日本の植物生理学関係の研究者にこぞってよい論文を投稿していただかなければならない。季刊であるが、今年は1號だけをだし、明年第1巻を完了し、明後年から年1巻(4號)ずつをだす予定である。

本会のもう1つの重要な事業はシンポジウムである。はじめは9月にひらく予定だったが、この時期に都合のわるい会員がかなりあるらしいことや、もつとひろく意見をきいて準備するほうがよいとかんがえられたので、延期した。シンポジウムが、植物生理学関係者のよい連絡の場となり、研究の前進に大きく役だつものとなるようにしたい。

会務の進行状況や会員名簿、シンポジウムに関する連絡事項、欧文誌の投稿規定など、早くおめにかけなければならぬのに、この邦文会誌の出版自体が、おもわぬことで計畫をたてなおさなければならぬはめにおちたりして、すっかりおくれってしまった。それというもこの会報を、会の財政的の實力以上に大きいものにしたいと、よくばったのがいけなかったので、この点を御諒承ねがいたい。

しかし、強力な酵素類はそろっているのに、基質が十分でないのが現状である。芽をだしたが、エネルギー源が続かねばならない。会員、特に外國会員を十分獲得して、独立栄養になるまでには、從屬栄養の期間がつづくから、どうしてもかなりの一般寄付をあつめ、また賛助会員の依頼をしなければならぬ。各方面の援助がえられるよう、みなさんの御盡力をおねがいする次第である。